

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Speech and thought presentation in dialogue and narrative

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 治彦, Yamaguchi, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/825">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/825</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 対話の話法, 語りの話法

—英語話法再考(2)—

山口 治彦

## 1. はじめに

英語の話法は, i) 直接的な引用か間接的な引用か, および ii) 伝達節と共起するか否か, というふたつの基準によって, 直接話法(direct discourse), 間接話法(indirect discourse), 自由直接話法(free direct discourse), そして自由間接話法(free indirect discourse)に分類されることが多い。このような形式的基準によって話法が4分割される様を表にすると次のようになる。“I am a genius!”という原=発話(original utterance)がそれぞれの話法で提示された場合の例をイタリックで示しておいた。

### (1) 形式的特徴による話法の4分割

	Bound	Free
Direct	<b>Direct Discourse</b> <i>Yukio said, "I am a genius!"</i> <i>"I am a genius!" Yukio said.</i>	<b>Free Direct Discourse</b> <i>"I am a genius!"</i>
Indirect	<b>Indirect Discourse</b> <i>Yukio said (that) he was a genius.</i>	<b>Free Indirect Discourse</b> <i>He was a genius! (he said)</i>

(1)の分類法は, 一般に広く受け入れられているにもかかわらず, 形式上

1 用語について付言しておく。小稿では, 伝達節と共起する話法を“bound”(「拘束された」, 「拘束(型の)」)と呼ぶ。伝達節をもたない話法は“free”(「自由な」, 「自由(型の)」)といわれるので, これと対立させた。この分類法にしたがえば, 従来の直接話法は“bound·direct discourse”「拘束直接話法」, そして間接話法は“bound indirect discourse”「拘束間接話法」とそれぞれ呼ばれることになる。しかし, 「直接話法」や「間接話法」という用語がすでに定着している現状を考慮し, 「自由な」話法と明確に対立させる必要のある場合を除き, 従来の名, つまり「直接話法」と「間接話法」という語を用いる。

の区別を示す以外に、積極的に意味づけられることがこれまでなかった。たしかに、直接話法と間接話法を比較する（たとえば、Wierzbicka, 1974; Li, 1986）、もしくは自由間接話法と直接話法や間接話法を比較する（たとえば、Banfield, 1973, 1982）というように、区分された個々の話法を比較することはおこなわれていた。しかし、伝達節をもつ話法（直接話法+間接話法）と伝達節をもたない話法（自由直接話法+自由間接話法）とを上記の分類にもとづいてブロック単位で比較し、伝達節を持つということがどのような意味をもつのか調べる、といった研究はこれまでのところおこなわれていない。直接的な話法と間接的な話法との対比についても事情は変わらない。

さらに都合の悪いことには、この分類の意義が失われるような主張も時おり聞かれる。Short, 1988や Semino et al, 1997は、自由直接話法というカテゴリーが不要であると示唆している。直接話法とじゅうぶんなかたちでは機能的に対立しない、というのが彼らの根拠である。もし、彼らの主張が正当なものであるならば、<sup>2</sup> 上の4分割はその存在理由を失ってしまうだろう。ふたつの基準のうちの少なくともひとつ——「自由である」のか否かの基準——が無意味であることになるからである。

はたして、上記の4分割は形式的区分以上のものを生み出さないのだろうか。ことばを換えれば、このように話法を分類することにどのような意義があるのだろうか。そのことをまず問わねばならない。不思議なことに、従来の話法研究はこの点に関してあまり切実な要求を感じていなかったようなのである。

形式が違えば意味もまた異なる。Bolinger, 1977以来奉じられてきたテーゼが正しいものならば、上記の形式的区分も意味（機能）上の対立を生み出してよいはずである。では、そのような対立とはどのようなものか。そして、なぜ、そのような対立を従来の話法研究は見過ごしてきたのか。

話法研究に潜む暗黙の前提にとらわれた結果、これまでの話法研究は上記

2 Shortらの見解に対する反論については、山口, 2000を参照。

4分割が本来指し示す対立軸を見出せなかった。小稿の主張を要約するとそうなる。上記の4分割が本来指し示す対立軸とは、話法の形式的特徴と、各話法が生起するコンテキストおよびそれぞれが担う機能との対応である。そして、話法研究に潜む暗黙の前提とは、i) 伝達節をともなう直接話法と間接話法が話法の二大典型であり、ii) 話法は第三者のことは報告するための言語手段である、とする考え方である(山口, 2003)。話法研究においてはあまりに当たり前になっている前提が私たちの視野を狭めてきたのである。

このような考えにもとづき、小稿は話法研究に対する新たな視点を提案する。これまで見過ごされてきた話法の対話的な用法を話法の原初的形式としてとらえ、対話(dialogue)から語り(narrative)へとコンテキストが変化する過程において、話法の形式と機能とコンテキスト、この三者の対応を見据える視点である。そのためには、まず、これまで蔑ろにされてきた話法の対話的用法の広がりを示す必要があるだろう(2節)。次に、話法が生起するコンテキストとその形式的特徴との関係を明らかにする(3節)。そして、先の4分割に戻り、この分類法に新たな意義づけをおこないたい(4節)。

## 2. 対話的用法の広がり

山口, 2003で明らかにしたように、これまでの話法研究は、第三者のことは聞き手に伝えるコンテキスト(語りのコンテキスト)を常に想定していた。そして、伝達節付きの話法の存在を強調し、次に見るような直接話法と間接話法が話法の二大典型としていた。

- (2) I'll never forget the English teacher I had in high school. I wrote a poem. (a)She called me in and said, "Where did you plagiarize this poem from?" (b)I said I didn't. (c)She said, "If I ever find that you plagiarized this poem, I'll make sure that you

get an F in this class and I'll have you kicked out of school."

(Anita Herbert in S. Terkel, *Race*)

上の例で、話法は、語り手が過去の出来事において第三者("the English teacher")と交わした発話を報告・再現するために用いられている。下線部(2a)と(2c)、および(2b)は、それぞれ典型的な直接話法と間接話法の用法である。このような引用形式が話法の典型とされる一方で、対話的な引用方法は蔑ろにされてきた。まずは、対話のやりとりにおける「自由な」話法の用法について確認しておこう。

## 2.1 対話における自由話法

(3) BILLY: Brian, this is not the first time I've seen you having delusions. How many other times have I seen you in this state? How much more whiskey do you have to drink before you permanently damage what's left of your brains and your talent?

BRIAN: (a)Seen me like what, Billy? Drunk, mad, whimsical, with a loaded gun in my hand preparing to blow an east to west tunnel through your fucking head? The answer to that is never, Billy... (b)How much more whiskey do I have to drink before I permanently damage what's left of my brains and talent? That's easy, Bill. My talent is beyond damage. I didn't destroy it. I used it up.

(N. Simon, *London Suite*)

(3a)や(3b)は、エコー疑問(問い返し疑問: echo question)の例である。エコー疑問に代表されるエコー表現(echo utterances)は、対話者の前言を引用者自身のイントネーションを付して繰り返す(=引用することにより、その前言に対する引用者の態度を表明する。前言の再提示や確認を求めたり、前言に対する驚きや不信感を表現したりするなど、会話の流れがスムーズで

はなく、何らかの障害があるときに用いられることが多い。

この例で Brian は、そのようなエコーの性質を意図的に利用し、Billy が矢継ぎ早に発した自分に対する糾弾の流れをさえぎり、ゆっくりとそしてシニカルに反論するためにエコーを用いている。下線部(3a)において、Billy が自分の預貯金をすべて横領したことを知る Brian は、彼のことばのあいまいな部分(“in this state”)を正すべくわざと皮肉に繰り返し(“Seen me like what, Billy?”), さらに相手の疑問を自分なりにその場の状況——彼は Billy に拳銃を突きつけている——に応じて補足・脚色してエコーすることで、Billy に対し冷笑的な(しかし、どこかコミカルな)恐さを演出している。次に、下線部(3b)では、Billy のふたつ目の問い詰めを人称を変更する以外はほぼそのままに、ゆっくりと批判的に提示する。そのすぐ後で Billy による糾弾が前提を取り違えていることを指摘するためである。

(1)の4分割にしたがえば、上のエコー表現は、伝達節をもたず、人称を変更して間接的な引用をおこなっている点で、自由間接話法と見なすことができる。小説に見られるような自由間接話法とは用いられるコンテキストが大きく異なるが、両者は i) 自由かつ間接的な引用方法であり、および ii) 引用者自身のイントネーションがかぶせられた多声的(polyphonic)な引用である、という点において共通する。しかしながら、エコーが話法の一部として直接話法や間接話法と同列に並べられて記述されることはなかった。近年になり、エコーの引用としての側面に注目する論者が増えてきたが(Adamson, 1994; Blakemore, 1994; Iwata, 2003; Noh, 1995, 1998; Sperber and Wilson, 1995; Wilson and Sperber, 1988; Yamaguchi, 1989, 1992, 1994a, 1994b), 以前は引用形式として取り扱われることはなかった。話法として取り扱われるのは、報告を旨とする語りにおける引用形式にかぎられていたのである。同様のことは、対話的な状況で用いられる自由直接話法についてもいえる。

(4) SELRIDGE: What an asshole.

HENNESEY: It's my last week. I can spend it any way I want.  
I'd like it to be with my family.

CARNEY: (*Mimicking him*) I'd like it to be with my family.

SELRIDGE: Go ahead, Jerome. What do you give him for *that* crap?

EUGENE: It's not interesting but at least it's honest... I give him a B-plus. (N. Simon, *Biloxi Blues*)

(4)の登場人物たちは、自分が戦死すると分かっていたら最後の1週間に何をするかで賭けをしている。もっとも気の利いた答えをしたものが掛け金を総取りできるというルールである。生真面目に「家族といたい」という Hennesey に対し Carney は彼のことばを真似て繰り返すことで、意地悪く揶揄している。場合によってはかなり失礼な引用になるが、この種のパロディ的な繰り返しを会話では時おり耳にすることがある。

(4)の下線部が(3)におけるような間接引用と異なる点は、相手の発話をまじめには取り合わないところにある。相手のことばに手を加えず直接的に引用し、さらにあざけりや揶揄の調子を加えることによって、相手の発話が話し手のディスコースとは異質のものであり、価値をおとしめたり笑い飛ばしたりすべき対象であることを伝えている。(4)の下線部に見るような引用方法は、形式上、自由直接話法と見なせるが、(3)のエコーと同様、これまでの話法研究で言及されることはほとんどなかったのである。小稿では、模倣引用、もしくは(対話型)自由直接引用と呼ぶことにしよう。

## 2.2 直接話法と間接話法の対話用法

このように、これまで蔑ろにされてきたものの、「自由な」話法には(3)や(4)のような対話的な用法が存在する。同様に、直接話法と間接話法にも対話的な用法が存在するのだが、そのことについてもこれまで指摘されることは

なかった。

(5) ALVY: (*Thinking*) Tsch, what'd the doctor say?

ANNIE: (*Putting away some groceries*) Well, she said that I should probably come five times a week. And you know something? I don't think I mind analysis at all. The only question is, Will it change my wife?

ALVY: Will it change your wife?

ANNIE: Will it change my life?

ALVY: Yeah, but you said, "Will it change my wife"!

ANNIE: No, I don't. (*Laughing*) I said, "Will it change my life," Alvy.

ALVY: You said, "Will it change..." Wife. Will it change...

ANNIE: (*Yelling out, angry*) Life. I said, "life."

ALVY: (*To the audience*) She said, "Will it change my wife."

(W. Allen, *Annie Hall*)

(6) GARRISON: This was a military-style ambush from start to finish. This was a coup d'etat with Lyndon Johnson waiting in the wings.

BROUSSARD: Oh, okay! So now you're sayin' Lyndon Johnson was involved? Huh? The President of the United States?

(O. Stone and Z. Sklar, *JFK*)

(5)の Annie と Alvy は、Annie が言い間違いをした、しないで言い争っている。まず、双方ともエコーによって問題を明らかにし会話を修復しようとする。Alvy は即座にエコー疑問により言い間違いがあったことを示す ("Will it change your wife?")。これに対し、Annie は (統語的な形式は疑問文であるが) 下降調のイントネーションを用い "Will it change my wife?" と自分がいった (はずの) 発言を再提示している。これは、大沼、1970のいう echo declarative である。「違うわよ。"Will it change my



life?” (といったの) よ」というようなニュアンスがこめられている。

ところが、エコーの応酬では解決が見えない。次に、彼らは直接話法による発話提示をぶつけ合う。直接話法によって相手もしくは自分がいった (はずの) 発言を引用することにより、エコーによるやりとりよりもきっぱりと互いの主張を断定し合っている。この直接話法は発話を報告しているのではない。伝達をおこなううえで問題となる言い間違いを特定するために互いのことばを引用しているのである。これまで直接話法のこのような用法は問題にされることがなかった。

一方、相手や自分の発話ではなく、今ここにはいない第三者のことばを引用するとき、話法は報告の機能を果たす。最初のAlvyの問いかけに答えたAnnieの間接話法 (“Well, she said that I should probably come five times a week.”) は、一般によく知られている報告の用法である。過去の出来事 (発話) を今、聞き手に伝えている。その点、観客に直接語りかけているAlvyの直接話法 (“She said, Will it change my wife.”) は、発話を報告しようとしているのか、伝達上の問題に言及しているのか決めがたい。観客はAlvyとAnnieのやりとりを目の前で見ている。したがって、Annieは観客にとってまったくの第三者というわけではない。その結果、対話の用法なのか、語りの用法なのか判然としないものになったであろう。

(6)においてGarrisonは、ケネディーの暗殺が陰謀によるものであり、ケネディーの跡を継いだLyndon Johnsonも加担していたと主張する。しかし、部下のBroussardにはその考えが受け入れられない。そこで、BroussardはGarrisonの比喩的な言い回し (“waiting in the wings”) を間接話法を用いてより明示的なことばで再提示し、Garrisonの考えが理にかなっていないと主張しようとしている。相手の直前のことばに言及しながら、疑問 (疑念) のイントネーションで間接話法を発しているため、この間接引用はいくぶんエコー疑問のような響きをもっている。後に続く “The President of the United States?” も前言のLyndon Johnsonのことをエ

コーしているようにも解釈できる。下線部の間接話法は機能のうえでも響きのうえでも、いわゆる報告としての間接話法からは遠く、エコーに近い。このような用法は、(5)の直接話法と同様、これまでの話法研究で取り上げられることはなかった。

話法の対話的用法は、エコーにせよ、上に見る間接引用にせよ、対話者とのやりとりがスムーズにいかないときに用いられていることに留意せねばならない。対話のコンテキストにおいて話法が用いられるのは、たいてい何らかのかたちで伝達障害が見られ、その障害を取り除くべく話の俎上にのせるためである（ヴァインリッヒ、1984）。コミュニケーションに何ら問題がないならば、わざわざ相手のことばを引用してそのことばに注目を集める必要はない。

### 2.3 対話的話法における機能分業

もっとも、「自由な」話法と伝達節付きの話法とのあいだには一定の機能分業が見られる。たとえば、(6)において仮に Broussard が “Coup d’etat with Lyndon Johnson waiting in the wings?” と問い返す場合と、下線部のように “Oh, okay! So now you’re sayin’ Lyndon Johnson was involved?” と間接話法で相手の考えを提示するのとでは、表現意図や与える印象がかなり異なる。エコーのほうが前言に対する即座の反応として受け取られるのに対し、間接話法のほうは意見の対立が決定的であることを話し手が自覚しているように思える。つまり、立ち向かうべき伝達障害が大きく、「自由な」話法では事足りない場合に伝達節付きの話法は用いられるようなのだ。次の例で確かめてみよう。

(7) WILL: You ever wonder what your life would be like if you uh,  
if you never met your wife?

SEAN: What? Wonder if I’d be better off without her?

WILL: No, no, no, I'm not saying, like, better off.

SEAN: No.

WILL: I didn't mean it like that.

SEAN: It's all right. It's an important question.

(M. Damon and B. Affleck, *Good Will Hunting*)

妻に先立たれた Sean に対し、彼女とめぐり合っていなかったとしたら人生はどのようになっていたと思うか、と Will は質問する。Sean の即座の反応はエコー疑問による前言の確認 (“What? Wonder if I'd be better off without her?”) であった。しかし、その反応から質問の意図が少しゆがめられて理解されていると感じ取った Will は、伝達節付きの話法を用いて相手のことばに込められたニュアンスを否定しようとする。

ここで留意すべきは、会話中に伝達障害が起きた場合に、相手のことばをはっきりと否定しようとするなら伝達節付きの話法を用いるしか方法がない、ということである。「自由な」話法には否定形が存在しない。対話における「自由な」話法は、前言に対する即座の反応として用いられる。その場合、相手のことばを受け止めるにせよ、笑い飛ばすにせよ、そのことば自体を否定することはない。前言の繰り返しである以上、その前言（の一部）を否定することはできないのである。もとより、「自由な」話法は、否定を可能にするような語彙的・文法的手段をもたない。しかし、伝達節が非伝達節を統語的にしたがえる場合、否定は可能である。<sup>3</sup> 伝達節が前にくる話法には、非伝達節が指し示す内容を非現実のものとする一定の操作——否定形、未来形、疑問形——が可能なのである。

ここまでの観察をまとめると以下のようなになる。

3 伝達節が後置されて挿入節として機能する場合も伝達動詞の否定は認められない (Banfield, 1982: 47)。挿入節による発話提示は、対話的な自由話法の場合と同様、非伝達節で提示された発話の存在を前提としてしまうからである。

まず、伝達節付きの話法にも対話的な用法が存在する。その場合、伝達節付きの話法であっても原＝発話の報告をおこなうのではなく、原＝発話がもとでもつれた会話の糸を修正する（ために対話者の目を原＝発話に向ける）機能を担う。したがって、エコー疑問などの対話的な引用方法と第三者のことばを報告する話法とのあいだに果たす機能に差があるというだけでは、対話的な引用方法を話法の範疇外とする理由にはならない。コンテキストが違えば話法が果たす機能も異なるのである。

次に、対話用法においては、伝達節付きの話法と「自由な」話法とのあいだには語用論的分業(pragmatic division of labor: Horn, 1983)が見られる。対話における即座の反応としては、まず「自由な」話法が用いられ、それでは事足りない状況で伝達節付きの話法が用いられる。実際、対話のコンテキストにおいて相手のことばに言及する場合、「自由な」話法のほうが拘束型の話法よりはるかに多用される。その意味において対話用法では「自由な」話法が無標(unmarked)であり、伝達節付きの話法は有標(marked)である。

### 3. コンテキストと話法の形式：話法研究の新しい視座

これまで見てきたように、話法には従来考えられていたよりも大きな広がりがある。エコーや模倣引用のような対話的な引用形式も話法の重要な構成素なのである。したがって、直接話法と間接話法が重要な引用形式であることには変わらないものの、これらふたつの話法のみを中心に据える記述はもはや受け入れられない。では、英語話法の全体像はどのようにとらえられるべきであろうか。

話法に対話の用法と語りの用法がある以上、話法が用いられるコンテキストから目をそらすわけにはいかない。そこでまず、話法が用いられるこのふたつのコンテキストの違いに注意してみよう。

### 3.1 語りは対話よりも複雑である

語りと対話とを分かつ基準としては、チェイフの近接性(immediacy)と遠隔化(displacement)という概念が有効である。チェイフは、今、ここにある物事について意識を集中している近接の場面と、時空間的に隔てられたことながらに言及している遠隔化された場合とは質的に異なる、と主張している(Chafe (1992, 1994))。実際、話法においても質的な相違が両者のあいだに見られる。

近接的な対話の状況では、話し手は対話者が直前に述べたことばに言及するために話法を用いる。したがって、対話的用法においては、引用者とその対話者、このふたりの話者しか引用に関与しない。対話のやりとりにおいて話法を用いる場合、引用者は、「私」と「あなた」のふたつの視点——1人称と2人称——のみを考慮すればよい。

一方、遠隔化された語りの状況では、過去の出来事におけることばのやりとりを引用する。そのため、引用者は、自分自身(=語り手)とその聞き手以外に、原=発話の話し手(=登場人物A)とその聞き手(=登場人物B)の視点について考慮せねばならない。つまり、今ここにはいない第三者(3人称)の視点が引用に介在することになる。コミュニケーションの回路も、引用者(語り手)からその聞き手へのコミュニケーションの軸と、登場人物同士のコミュニケーション軸とのふたつを考え合わさねばならない。語りて引用をおこなう際のコンテキストは、対話的引用のコンテキストより複雑な構成になる。<sup>4</sup>

このように複雑な構成をもった語りのコンテキストにおいては、伝達節を有する直接話法と間接話法とが無標の引用形式である。その傾向は口頭の語りにおいて特に強い。その結果、語りにおける「自由な」話法の重要度は相

4 語りの構成上の複雑さゆえ、子どもは語りの話法をおこなう際に、しばしば視点の整合性を保てないことがある。また、引用すべき発話を登場人物がおこなった行為として(語りの地の文で)説明してから、その同じ発話をもう一度ことばとして引用するといった二度手間をおこなうことがあると報告されている(Hickmann, 1993)。

対的に低くなる。事実、口頭の語りにおいて「自由な」話法が用いられるのは、伝達節がなくとも誰の発話なのか明らかであるときか、もしくは伝達節がないことによって一定の表現効果（たとえば、皮肉なイントネーションをかぶせた多声的な引用）が得られるときにかぎられるようである。

これに対して、対話では「自由な」話法が無標の選択であり、伝達節付きの「拘束型の」形式は有標の構造であった。先ほども述べたように、エコーや模倣引用といった「自由な」引用形式は、対話のコンテキストにおいて重用され、多声的な資質をじゅうぶんに発揮するのである。

要するに、話法形式とコンテキストとの関係について大まかな見当をつけておくと、対話のやりとりで対話者もしくは自分のことばに言及する場合には、おもに「自由な」話法が用いられ、語りのコンテキストにおいて第三者のことばを引用するときには、おもに拘束型の話法が用いられるのである。

### 3.2 直接話法と間接話法は自由話法よりも形式的に複雑である

では、「自由な」話法と「拘束された」話法は、形式面でどのような関係にあるだろうか。単純なことだが、自由直接話法と直接話法を比べた場合、直接話法のほうが伝達節が加えられた分だけ形式的に複雑である。直接話法には自由直接話法にはない節結合が加えられるわけで、それにしたがって統語的・意味的な制約が増える。間接話法と自由間接話法（エコー）についても同様のことがいえる。どちらも間接的な引用であるので、人称等の変更など間接引用に付随する制約は同等に存在する。しかし、自由間接話法（エコー）は主節としての地位を保っているのに対し、間接話法の被伝達節は基本的には従属節として位置づけられる。間接話法は補文化によるさらに大きな制約を背負っていることになる。

もっとも、いわゆる自由間接話法のほうが間接話法よりも複雑な形式をしているという印象が一般にはもたれているかもしれない。というのも、*this* や *now* のような近接を表す語彙的直示表現と過去形 *was* や人称 *he/she* の

ように遠隔を表す文法的直示形式が共起することが、(語りにおける)自由間接話法には時おり見かけられるからである。しかし、これは自由間接話法が出現する語り全体の問題であって、自由間接話法だけに固有の問題ではない。事実、語り手による状況描写の部分にも *now* と *was* の共起は同じように起こりうる。自由間接話法が生起する環境の特徴と自由間接話法自体の形式的な特徴とを混同すべきではない。特に、自由間接話法に関する議論では、三人称小説のように特殊なコンテキスト——書きことばが用いられ、話し手の存在が明示されない語り——から例を採ることが多いだけに注意する必要がある。

自由間接話法に関する説明が複雑な印象を与えることに対しては、さらにもうひとつ理由がある。従来の自由間接話法に対する説明が話法研究に潜む前提に縛られているからである。直接話法と間接話法という、より複雑な形式をベースにして、そこから自由間接話法を記述しようとする、いきおい説明が複雑化するのとは当然なのである。しかし、この場合、説明の複雑さは事実の複雑さを反映しているわけではない。他人のことばをどのように取り込むのかという観点から話法を眺めた場合、間接話法のほうが自由間接話法よりも構造が複雑で、制約も多い。自由型の構造と拘束型の構造とを比べるなら、伝達節のある拘束型のほうが形式面で明らかに複雑なのである。

### 3.3 コンテキストが文法化を動機づける

このように考えると、話法の形式的な複雑さの度合いと生起するコンテキストの複雑さの度合いとが対応していることに気づく。模倣引用やエコーのように形式の簡単な「自由な」話法は、もっとも基本的なコンテキストである対話で特徴的に用いられ、直接話法や間接話法のように形式的にもより複雑な伝達節付きの形式は、対話よりも複雑なコンテキストである語りにおいておもに用いられるのである。とするなら、話法の原初形態は、もっとも基

本的なコンテキストである対話に現れる話法、つまり、模倣引用やエコーのような「自由な」話法であり、形態の単純な「自由」話法をもとに語りのコンテキストが伝達節付きの直接話法と間接話法を生み出した、と考えるべきではないだろうか。

生起する環境の必要性が文法化を促進する。文法化には、コンテキストがダイナミックにかかわる側面も存在する。たとえば、Hopper and Thompson, 1984は、動詞の形態的な発達はディスコースの必要性に動機づけられている、と論じた。彼らはディスコースの必要性と述べるのみで語りのコンテキストがもたらす影響については明らかにしていないが、彼らが分析に用いたデータはすべて語りのテキストであった（Paul Hopper との私的談話による）。動詞がより複雑な形式を獲得するのに語りのコンテキストが大きく関与していたようなのである。話法の文法化も同様のことが考えられる。語りのコンテキストが伝達節付きの話法の文法化を促したのである。

対話のやりとりにおいては、原＝発話の話者が誰であるのか明示する必要がない。対話のコンテキストにおける引用は、たいてい原＝発話と引用が直前・直後の関係で隣接するからである。このような場面では誰のことばを写し取っているのかは一目瞭然である。したがって、対話のコンテキストにおいては、伝達節に対する必要性は低い。ならば、伝達節はないほうがよい。そのほうがすばやく反応できるし、引用者自身のイントネーションを付与しやすいからである（山口, 2000）。このように考えるなら、「自由な」話法を「伝達節を欠いた話法」と特徴づけるべきではない。「自由」話法は、伝達節を必要としない話法なのである。

他方、語りのコンテキストでは、遠隔化されたことばを引用する。過去に第三者（過去における引用者自身も含む）が発したことばを提示するのであるから、その発話が引用者の（現時点の）ことばではないことを示し、かつ誰による発話なのか聞き手に明示する必要がある。伝達節が必要なのはまさにこのような状況である。話法の形態は、生起するコンテキストに見合った



かたちをしている。環境がもたらす必然性がことばにかたちを与えたのであろう。

#### 4. 話法の4分割再見

さて、これまで得られた知見をもとに冒頭に掲げた4分割の表に立ち戻ってみよう。(1)に少々の手直しを施したのが(8)である。

##### (8) 話法の4分割 (改訂版)

	Free (simple form)	Bound (complex form)
Direct	<b>Free Direct Discourse</b> A: <i>"I am a genius!"</i> B: <i>"I am a genius!"</i>	<b>Direct Discourse</b> <i>Yukio said, "I am a genius!"</i> <i>"I am a genius!" Yukio said.</i>
Indirect	<b>Free Indirect Discourse (Echoes)</b> A: <i>"I am a genius!"</i> B: <i>You are a genius?!/!</i>	<b>Indirect Discourse</b> <i>Yukio said (that) he was a genius.</i>
Function	(initiation of) <b>repair</b>	<b>reporting</b>
Context	<b>dialogue</b>	<b>narrative</b>

まず、free と bound の順序を入れ替えた。「自由」な形式のほうが話法の原初形式である、という理解にもとづく変更である。free/bound の区別と direct/indirect の区別は、ともに話法の形態的な特徴についての区分である。話法の記述には、形式面だけでなく機能とコンテキストに注意を払うことが必要である。それゆえ、function と context という項目を付け加えた。この変更にしたがい、例文にはそれぞれのコンテキストにおける無標の構造だけを記しておいた。したがって、直接話法と間接話法の対話用法や、語りにおける自由間接話法の例は挙がっていない。上の分類は網羅的な分類を目指したのではなく、話法全体の大まかな広がりをとらえることを眼目としている。

このような表にして明確になったことがひとつある。それは、コンテクス

トと機能についての大まかな区分は、自由形式か拘束形式かという区分にしか対応していない、ということである。直接的か間接的かという区分は、少なくともコンテキスト上の対立とは対応していない。

直接か間接かという基準は、他人（相手）のことばを他人（相手）のことばとして自分のディスコースとは切り離し提示するのか、もしくは自分自身のディスコースに引き入れるかたちで提示するのか、という区別をもたらす。したがって、直接的な引用は、他人のことばを他人のことばとして提示する分だけ、ことば自体に対する関心が高められる傾向にある。一方、間接的な引用は他人のことばが指示する内容を志向する度合いが直接引用よりも強まる。直接か間接かという区分には、そのような機能上の対応が見られるものの、自由か拘束かの区別のようにコンテキストの差を巻き込んだかたちでは、対立関係を示すことがない。おそらく、直接的な引用か間接的な引用かという区分が話法にとってもっとも基本的な区別であるのだろう。<sup>5</sup>

ともあれ、自由形式か拘束形式かという対立は、コンテキストの変化（およびそれにしたがって起こる機能の変化）に対応している。広く受け入れられている話法の4分法は、単に形式的な区分のみを示すだけではなかった。対話的な引用を視野に収めてはじめて、この4分割の本来の意味合いが明らかになったのである。

#### 4. おわりに

これまでの話法研究は、話法を第三者のことばを報告する形式であるとしてとらえ、伝達節をともなった直接話法と間接話法を話法を中心に据えてきた。そして、そのことを当然のものとし、あえて疑おうとはしなかった。これに対し小稿は、この前提を補完する見方を提示した。少々大げさな言い方

5 人称上の対立からこの事実についての説明が可能であるように考えるが、この件については別稿に譲ることとする。

を許してもらえらるなら、小稿は話法研究のパラダイム転換を提案しているの  
である。これまで打ち捨てられていた話法の半分——話法の対話的用法——  
を見つめなおし、対話から語りへとコンテキストが変化していく流れのなか  
で話法の全貌をダイナミックにとらえる視点が、話法研究には必要なのでは  
ないだろうか。今後は、上述の視点からどのような話法の姿が見えるのか、  
個々の問題についてもう少し論じていきたい。

#### 参考文献

- Adamson, Sylvia. 1994. Subjectivity in narration: Empathy and echo. Yaguello, Marina (ed.) *Subjecthood and Subjectivity: The Status of the Subject in Linguistic Theory*. Paris: Ophrys. 193-208.
- Banfield, Ann. 1973. Narrative style and the grammar of direct speech. *Foundations of Language* 10, 1-39.
- ..... 1982. *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Boston: Routledge & Kegan Paul.
- Blakemore, Diane. 1994. Echo questions: A pragmatic account. *Lingua* 94, 197-211.
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Chafe, Wallace. 1992. Immediacy and displacement in consciousness and language. Coulmas, Florian and Jacob L. Mey (eds.) *Cooperating with Written Texts: The Pragmatics and Comprehension of Written Texts*. Berlin: Mouton de Gruyter. 231-255.
- ..... 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Couper-Kuhlen, Elizabeth. 1996. The prosody of repetition: On quoting and mimicry. Couper-Kuhlen, Elizabeth and Margaret Selting (eds.) *Prosody in Conversation: Interactional Studies*. Cambridge: Cambridge University Press. 366-405.
- Hickmann, Maya. 1993. The boundaries of reported speech in narrative discourse: Some developmental aspects. Lucy, John (ed.) *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. 63-90.
- Horn, Laurence. 1984. Toward a new taxonomy for pragmatic inference.

- Schiffrin, D. (ed.) *GURT 1984*, 11-42.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 1984. The discourse basis for lexical categories in universal grammar. *Language* 60, 703-752.
- Iwata, Seizi. 2003. Echo questions are interrogatives? Another version of a metarepresentational analysis. *Linguistics and Philosophy* 26: 185-254.
- Li, Charles N. 1986. Direct and indirect speech: A functional study. Coulmas, Florian (ed.) *Direct and Indirect Speech*. Berlin: Mouton de Gruyter. 29-45.
- Noh, Eun-Ju. 1995. A Pragmatic approach to echo questions. *UCL Working Papers in Linguistics*. 7, 107-140.
- ..... 1998. Echo Questions: Metarepresentation and pragmatic enrichment. *Linguistics and Philosophy* 21, 603-628.
- ..... 2000. *Metarepresentation: A Relevance Theory Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ohnuma, Masahiko (大沼雅彦). 1970. 「要説口語文法: (8) Echo Expression」 『英語研究』 1970年8月号, 40-41.
- Semino, Elena, Mick Short, and Jonathan Culpeper. 1997. Using a corpus to test a model of speech and thought presentation. *Poetics* 25, 17-34.
- Short, Mick. 1988. Speech presentation, the novel and the press. van Peer, Willie (ed.) *The Taming of the Text: Explorations in Language, Literature, and Culture*. London: Routledge. 61-81.
- ..... 1996. *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*. London: Longman.
- Sperber, Dan and Deidre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Weinrich, Harald (バインリッヒ, ハラルト). 1984 (1976). 「メタ言語の日常性について」 『言語とテクスト』 (脇阪豊ほか (訳)) 紀伊國屋書店. 93-118.
- Wilson, Deidre and Dan Sperber. 1988. Representation and relevance. Kempson, Ruth M. (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*. Cambridge: Cambridge University Press. 133-53.
- Wierzbicka, Anna. 1974. The semantics of direct and indirect discourse. *Papers in Linguistics* 7:3/4, 267-307.
- Yamaguchi, Haruhiko (山口治彦). 1989. On "unspeakable sentences": A

- pragmatic review. *Journal of Pragmatics* 13, 577-596.
- ..... 1992. 「繰り返せないことば：コンテキストが引用にもたらす影響」 安井泉 (編) 『グラマー・テキスト・レトリック』 くろしお出版. 289-320.
- ..... 1994a. Unrepeatable sentences: Contextual influence on speech and thought presentation. Parret, Herman (ed.) *Pretending to Communicate*. Berlin: Walter de Gruyter. 239-252.
- ..... 1994b. Echo utterances. Asher, R. E. (ed.) *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Oxford: Pergamon Press. 1084-1085.
- ..... 1998. 『語りのレトリック』 海鳴社.
- ..... 2000. 「話法とコンテキスト：自由直接話法をめぐって」 *JELS* 17 (日本英語学会第17回大会研究発表論文集), 261-270.
- ..... 2003 (印刷中). 「話法研究に潜む前提：英語話法再考(1)」 *CLAVEL* 1. (対照言語セミナー).